

一般臨床群における心理相談室への被援助中断に関する探索的研究

Study of searching on dropout and related factors in psychological counseling room at general clinical group

上坂 緑

Midori Kamisaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : カウンセリング, 被援助, 中断

Key words : Counseling, Dropout

1. 研究目的

心理臨床家は日々の経験により自身の臨床家としての技術を磨いていき、その専門知識をもって問題を抱えるクライアントをサポートしていく。クライアントが自身と向き合い、問題を解決したうでの終結がカウンセリングでは望ましいが、全てのカウンセリングが問題を終結させて終了するわけではなく、終了の前に中断する場合もある。

中断の定義は横田 (2016) 曰はく研究者によって異なる。クライアントの抱える問題が解決・改善する前に利用を中止することを指す場合や、回数または期間によって定義する場合もあるとしているが、本研究では横田 (2016) が定義した①おおよそ 10 回までに②カウンセラー及びクライアントが合意した目標に達成しない時点で、③クライアント自らが利用をやめることを定義とする。

丹治ら (2008) が臨床心理士 88 名を対象にセラピー (カウンセリング) の失敗要因を研究した時、カウンセリングにおける失敗の内、64%が「セラピーの中断 (ドロップアウト)」であるとの結果が出ていた。その要因としては「間違った介入 (31%)」「不適切なアセスメント (20%)」等が挙げられていた。

岩壁 (2007) ではセラピストの介入のどのような面が面接プロセスの失敗に影響を与えるかに関して、Elliott (1991) の心理療法におけるコミュニケーションの 5 次元に触れている。これは①プロセスの種類 (観察可能な行動と内的プロセス) ②テーマ・内容③やり方 (スタイル) ④行動⑤質 (全体的な評価) である。①プロセスの種類とはカウンセラーがクライアントに対し反射や直面化等どのような返しを行っているか、これらの反応を使用するときの意図やカウンセラー自身にカウンセ

リング中に起こる感情体験や認知操作を指す。②テーマ・内容とはクライアントとカウンセラーが話す内容のことであり、これはどのような理論を基にクライアントにアプローチするかによっても異なる。③やり方とはカウンセラーが介入するときの声の質、トーン、表情、そして相手に対して見せる非言語的コミュニケーションを指す。④行動とは、クライアントが話している最中にカウンセラーが行う行動 (足を組み替える、手を動かす等) を指す。⑤質とは、一つの介入がどれだけ上手く行われたという判断であるが、これは介入の選択とその意図、テーマと内容、カウンセラーの非言語的コミュニケーションの仕方、などの総合評価である。これらの次元の失敗は、カウンセラーの判断ミスや技術不足等によって簡単に起こりうるものであり、中断にも影響していると考えられる。

また、横田 (2016) では中断のカウンセラー側の要因としてカウンセラーのクライアントへの積極性の薄さ、治療の進展の期待に否定的である場合や、カウンセラー以外のスタッフの態度やカウンセリングを行う場の環境や設備、電話受付や待合室での事務対応等幅広い要因が中断に影響を及ぼすと述べている。これらはカウンセラー側からの中断要因に結びつくものであるが、それに対し、クライアントはどのような内的過程を経て中断を決断するのだろうか。

例えば永井 (2012) では、(心理的) 専門家への援助要請意図に対し「内面安定期待」「依存的解決期待」等が正の影響を与えていると示している。横田 (2012) でも「もうここしかない」とクライアントは期待を抱いてカウンセリングを訪れていることが窺える。こういった期待にそぐわないカ

ウンセリングを受けたと感じたクライアントも、中断群の中には存在するかもしれない。

また、横田 (2016) では諸研究者が明らかにしてきたクライアント側の要因として①デモグラフィック②精神疾患③パーソナリティ・心理状態④利用状況・態度と大別している。①デモグラフィックとは人口統計的変数を示すが、病院での患者の診療情報等をもとに調査が可能のため、最も調査しやすい変数とされている。所得の少ない者や教育年数の低い者は病院の受診を控える傾向がある事や、社会的孤立も中断に影響する事から、利用を継続する上での経済的・対人リソースの欠如は注目しなければならない要因であるとしている。②精神疾患も中断と関連している場合があるとされており、特にアルコール・薬物依存患者との関連が多くの研究で指摘されていると述べている。また、パーソナリティ障害との関連も指摘されている。③パーソナリティ・心理状況では、例えば攻撃性・敵意の高さや自己開示の拒絶・対人不信感が中断と関連すると述べられている。また、問題の否認や行動化傾向との関連の可能性も指摘されている。④利用状況・態度の内、特に動機付けの低さが大きく関わるとされている。また、専門家からサポートを得られていないと感じ、関わり方に不満が高い場合も中断に繋がりやすいと述べられている。

クライアントがどのような要因によって中断を決意するのか、正面から失敗や中断を扱った研究は国内では多くはなく、クライアント視点からの研究はさらに少数であるため未だ不明瞭な点もある。よって本研究では、クライアントの視点からカウンセリングの中断要因を明らかにし、その要因を取り除く取り組みを考察することを目的とする。

2. 研究実施内容

対象者：一般心理相談室での心理的援助（カウンセリング）を中断した経験のある一般臨床群 5～10 名程度

調査期間：約 5 か月

募集方法：知人の紹介や、修士論文用に作成された SNS や指導教員の運営する心理相談室のホームページに募集要項を載せ、調査対象者を募る。

調査方法：初めに、予備インタビューを行う。その後、対面式か引き続き Skype 等を用いるか相談し、インタビューを行う。

予備インタビュー：Skype 等を用いて行う。これは、まず調査対象者として適切かどうか判断するためであり、また、その後のインタビューに活かすため先にその対象者がどういった機関でカウンセリングを受けたか、何回カウンセリングを受けたか等の聞き取りを行っておくためである。

インタビュー：インタビューを受ける前に作業同盟目録クライアント版（クライアントがカウンセラーに対しどのような印象を抱いているか探る目録）と心理的距離評定尺度（カウンセラーとクライアントの間の心理的距離と親密性を測る尺度）に回答させ、その結果もインタビューの質問内容に随時組み込むことにより、より深く中断当時の状態を探る。主に中断した当時の状況や心境、中断した動機等に関してインタビューを行う。調査対象者の個人内差をどのような質問項目でインタビューするかは現在検討中である。また、調査対象者への配慮から、当時の相談内容に関しては極力質問しないものとする。

分析方法：インタビュー内容の分析方法として、M-GTA 法を採用する。これは、どういった心境や経緯を辿って中断に至ったかのプロセスを研究するためである。また、KH コーダーを用いた分析も行う。これは、筆者の主観的視点だけでなく、客観的視点からもデータの特徴を探るためである。

尚、本研究は平成 29 年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：29016）。

3. 今後の課題

今後は 4 月までにインタビュー用質問内容の作成、5 月から 9 月の間に調査対象者の募集と分析の準備としての逐語録の作成、10 月から 1 月に分析とまとめを行い、論文を執筆することを課題とする。

4. この助成による発表論文等

特に無し。